（社）国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター

I.T.I.

Japanese Centre of
International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I. NEWS 2013.1.31. No.123

社団法人国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITI は世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基づいて、演劇による国際交流の増進を目的に 1948 年創設され、本部はパリのユネスコ本部の中に置かれて、現在 100 カ国近くが加盟しています。

公益社団への移行に向けて

法人自治と自己責任経営を旨として

ITI 国際演劇協会
日本センター会長
永井　多恵子

本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年の重要なできごととして、まず挙げなければならないのは、公益社団法人への移行申請を行うために必要な手続きを昨年11月の臨時総会において討議可決したことです。新法人へ移行するためには、現法人の解散を伴いますので、現定款の定めにより（第42条）、構成員の4分の3以上の賛成が必要でしたが、おかげさまでこの高いハードルを無事超えることができました。皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

この議決を受けて、必要な書類を整え、1月になって早々に内閣府に申請書類を提出致しました。申請後およそ4カ月を目途に認定の可否が通知される予定と聞いています。

今後は、主務官庁の指導監督を受ける立場から一転して、法人自治と自己責任経営を旨として社会に貢献し社会から支えられる団体へと成長していくことが求められます。

当協会のここ最近の活動としては、文化庁委託事業として「国際演劇年鑑」を毎年編集発行しているのに加え、同年鑑の調査研究事業として行っているドラマ・リーディング事業が幸いにも次第に軌道に乗りつつあります。昨年12月に上演した『ほとりで』『Destination』『第三世代』は、三作とも満員の盛況でした。また、近年は、当センターの活動においても、中国、韓国、タイなど、アジア地域との交流の機会が増えています。今号でも、菱沼理事による「アジア演劇人連盟」執行委員会、理事会の報告が紹介されるなど、変貌著しいアジア演劇から目を離せない状況が続くでしょう。アジア地域に限らず、今や、ＩＴＩの活動は世界のあらゆる地域とつながりを深めていると言ってよいと思われます。

もし、予定通り公益認定を受けられた場合には、新定款によって団体会員にも参加していただくことが可能になります。これを機に、新加入団体の勧誘に努め、公益社団としての力量を高めて、大方のご期待に応えられる活動を展開できるように一層努めてまいりたいと存じます。

皆様のご支援ご協力を心からお願い申し上げます。

ＩＴＩ日本センターは、昨年度通常総会での公益社団への移行準備決議を受けて、今年度は、６月の通常総会に加えて、11月に臨時総会を開催しました。主な議事及び討議内容は次の通りです。

ＩＴＩ日本センター平成24年度通常総会（６月）報告

平成24年度通常総会議事録から抜粋

日時　平成24年６月16日（土）午後１時から

会場　松竹株式会社　大会議室（東劇ビル10階）

会員現在数　２８２名（定足数１４２名）

出席者　１５３名（総会は成立）。委任状提出者　１３２名

出席会員（21名）　安孫子正、伊藤（舟本）巴子、伊藤　洋、大笹吉雄、大島信久、小田切ようこ（洋子）、尾上墨雪、小林弘文、斎明寺（関根）以玖子、真藤美一、曽田修司、高橋幸夫、永井多恵子、林　英樹、菱沼彬晁、星埜恵子、堀川登志子、松下芳江、松田和彦、宗重博之、吉岩正晴。

議案

第１号議案及び第２号議案

平成23年度事業報告及び決算報告の承認

第３号議案及び第４号議案

平成24年度事業計画および予算案の承認

第５号議案

役員（理事・監事）の再任について

第６号議案

会員の除名について（編集部注＝公益社団への移行準備のため）

議論の経過と結果

第１号議案及び第２号議案は、提案通り承認されました。

第３号議案及び第４号議案は、事業計画について一部細かい修正を加えて承認されました。

第５号議案は、公益社団への移行準備のため、現役員（理事・監事）を再任することが全員の賛成により了承されました。

第６号議案については、２００９～２０１１年度の３年間にわたって会費の納入が一度もない会員について、定款第11条三に基づき、除名の手続きをとることとしました。

採決に先立って、３年以上にわたって会費未納となっている会員に対して、今年度に入り２度にわたって督促状を送付するとともに、５月末までに納付がない場合に除名となることを伝え、それでもなお、会費の支払いがなされなかったことについて報告がありました。

また、通知の際に、希望者には再入会の勧誘を行うことも了解されました。本件には、出席者21名中19名が賛成し、当該出席者に対する委任状を含め、賛成票は１１４であったので、本議案は可決されました。

対象会員名（定款第11条三による）47名

青山祐二、荒谷大輔、安藤隆之、飯田道朗、市山七百蔵、井上幸太郎、井上真次、岩浅豊明、岡田順子、尾花輝代允、織田紘二、風間研、観世元信、北大路欣也、キタムラアラタ、栗原千絵子、鴻上尚史、小林志郎、駒井義之、近藤正臣、佐藤恵美子、佐野睦、塩瀬宏、品川能正、立石涼子、谷正雄、寺倉正太郎、中野渡司、中村茂昭、西村英方、西村洋一、丹羽文夫、野中マリ子、長谷川祐子、服部基、埴生志郎、針山祐美、藤間亜寿賀、藤間祐助、舟川絢子、松岡和子、水谷雄司、三宅文子、横山正、吉岡友治、若柳吉三次、渡辺守章

ＩＴＩ日本センター平成24年度臨時総会（11月）報告

平成24年度臨時総会議事録から抜粋

日時　平成24年11月25日（日）午後１時から

会場　松竹株式会社　大会議室（東劇ビル10階）

会員現在数　２３５名（第１号・第２号議案に必要な出席者数１７７名）

出席者　１９４名（総会は成立。定款第41条及び同第42条に係る議決も有効）

出席会員（29名）　安宅りさ子、安孫子正、壱岐照美、伊藤（舟本）巴子、伊藤洋、大笹吉雄、大島信久、小田切ようこ（洋子）、尾上墨雪、絹川由梨、小林弘文、関根（斎明寺）以玖子、真藤美一、曽田修司、高萩宏、高橋幸夫、永井多恵子、中山夏織、庭山由佳、林英樹、菱沼彬晁、星埜恵子、堀川登志子、松下芳江、松田和彦、八幡泰彦、吉井澄雄、吉岩正晴、和崎信哉　委任状提出者：１６５名

議案

第１号議案　移行認定申請に関する件

第２号議案　定款変更案の承認の件

第３号議案　新法人役員（理事及び監事）選任の件

議論の経過と結果

第１号、第２号議案は、原案どおり可決。また、定款の案等について、軽微な修正は会長に一任することが了解されました。

新理事18名、監事3名を選任

第３号議案では、候補ごとに個別に採決を行い、次の理事監事が選任されました。

理事（18名）　安宅りさ子（*）、安孫子正、伊藤洋、大笹吉雄、小田切ようこ（洋子）、斎明寺（関根）以玖子、坂手洋二（*）、真藤美一、曽田修司、高萩宏、永井多恵子、永江巌、中山夏織、林英樹、菱沼彬晁、松田和彦、吉岩正晴、和崎信哉

監事（3名）　伊藤（舟本）巴子、小林弘文、吉井澄雄

採決結果　（*）印の候補以外は満票（１９４票）、（*）の候補は反対１票。

新公益法人制度とは　平成18年に公益法人改革のための法律が制定され、すでに平成20年12月から「新公益法人制度」が施行されています。これまでの社団法人は平成25年11月までに「一般社団法人」か「公益社団法人」のどちらかを選び、移行申請を行うことになっています。申請を行わない場合は法人解散となり、法人存続のためには避けて通れない関門です。当協会としては、平成23年度通常総会で公益社団法人への準備を進めることが承認されました。

この「新公益法人制度」導入の目的は「民間による非営利の活動を活発にし、民（みん）による公益を増進する」ことにあります（内閣府ホームページより）。

国の公益認定等委員会などで認められた「公益社団・財団法人」には、高い公益性が厳しく求められる一方で、法人税において公益目的事業が非課税となり（収益事業は課税）、公益法人への寄附者に対する寄附税制の優遇措置などが設けられています。

アジア演劇人連盟理事会の会期中に中国国家話劇院主催による国際演劇祭「華彩欧州」がスタートし、アジアとヨーロッパ演劇人による演劇フォーラムも併催された＝北京ヒルトンホテルで

今年11月

雲南省昆明でアジア芸術祭

アジア演劇人連盟が参加呼びかけ

アジア演劇人連盟（理事長・周志強中国国家話劇院院長）は昨年9月28日に執行委員会を北京に招集、続いて10月17日に理事会を開催しました。連盟発展の道筋について意見を交わす中、具体的な活動として今年11月18日から27日までの10日間、雲南省昆明市で開催される第13回アジア芸術祭に連盟として参加することが提議され、了承されました。今年の芸術祭は中国文化部と雲南省人民政府が共催するものですが、アジア演劇人連盟と中国国家話劇院はこの運営に積極的に関与して、加盟国の優れた作品を推薦することを申し合わせました。

（報告・菱沼彬晃）

ＩＴＩ会長・マジュンダ氏が参加して

昨秋、執行部会と理事会を開催

昨年9月28日、中国国家話劇院会議室で開かれたアジア演劇人連盟の執行委員会

開幕公演は中韓合作の『ロミオとジュリエット』

すでに中国国家話劇院と韓国国立劇場（孫振策代表＝連盟常任理事）が『ロミオとジュリエット』の共同制作を進めているところから、各国がこれを共通のテーマとして独自のバージョンで参加できないものかという提案がなされました。

ベトナムから参加したリイ・ヒュンLe Hung（ベトナム話劇院院長・ベトナム青少年話劇院院長＝連盟常任理事）が賛意を表したほか、中韓共同制作の『ロミオとジュリエット』を芸術祭の開幕公演として推薦することが了承されました。

一方、今年はイプセン生誕185周年、チェーホフ没後110周年の前年に当たり、イプセンやチェーホフにちなむ作品をとの提案もありましたが、テーマには制約を設けず、各国の文化と伝統、現代的状況に根ざした作品、あるいはその国を代表するにふさわしい作品を期待することになりました。

翌月10月17日に開催された理事会は執行部会の報告を了承し、帰国後に作品の選定と制作に取りかかることを申し合わせました。日本では現在、ＩＴＩを中心とするアジア演劇人連盟常任理事、執行委員らが作品の絞り込みに取り組んでいます。

アジア演劇発展のため

中日両国が協力を密に

中国国家話劇院院長
アジア演劇人連盟理事長　周志強

ＩＴＩと日本演劇界の友人の皆さま。アジア演劇人連盟理事長として心からのご挨拶を申し上げます。

２０１１年10月、アジア演劇人連盟は中国の重慶市で成立を宣言しました。「交流・合作・互助・互恵」を理念として、アジアの演劇人は互いに交流のチャンネルを広げ、多くの共同プログラムが実施の段階に入って喜ぶべき成果を収めようとしています。

中日両国は一衣帯水の隣国です。両国の演劇交流は数代にわたる演劇人のたゆまぬ努力が実って、今日の揺るがぬ基盤を固めました。

アジア演劇人連盟は発足と同時にＩＴＩに加盟し、ＩＴＩ日本センターは一心同体の仲間と理解しています。また、連盟の日本側窓口となっている話劇人社は中国演劇界の古い友人であるだけでなく、アジア各国、各地域との緊密な共同事業を促して上演活動の基盤を作り出し、その成果を共に享受する働きで大きな貢献をしています。

今後、日本の演劇界の友人たちと密接な共同事業を継続し、実際的な活動を通して豊富多彩なアジアの演劇文化を継承することの意義は、いくら強調してもしすぎることはありません。

アジア演劇の発展に道筋をつけると共にアジア演劇の交流と共同事業を展開し、国と国、国と地域の間に演劇交流の互助組織を形成し、育成していくことを熱望してやみません。

アジア芸術祭に奮ってご参加を

２０１３年11月、中国文化部が主催する「アジア芸術祭」は中国雲南省昆明の地で挙行されることになりました。今年13回目の実績を持つ「アジア芸術祭」の大舞台を存分に活用し、アジア演劇人連盟の発展を期するため、加盟各国選りすぐりの演目が数多く参加されることを期待しています。

私たちの共同事業とアジア演劇の活況が世界の演劇界の耳をそばだたせ、世界各国、各地域との芸術交流と対話を促進できるよう、共に手を携えて歩もうではありませんか。

アジア各国の新作台本を発掘し、多国語に翻訳を

さらに連盟の活動強化について意見を交わす中、上演台本の不足を嘆く声が上がり、連盟に次の取り組みを求めました。

①連盟は加盟国のすぐれた作品の発掘に努め、多国語に翻訳して上演に供し、制作上の便宜、関係機関の協力を提供する。

②連盟がすぐれた台本の上演に向けて制作の中心となり、加盟国に共同制作を呼びかける。作品は2年に一度のアジア芸術祭で上演し、一つの舞台に各国のスタッフ・キャストが参加して交流と文化の融合を図る。

③連盟は各国のすぐれた台本の選集出版に合わせて、DVD等視覚資料の作成を通して各国の演劇交流を増進する。

ITI会長を中心にアジア演劇年鑑の発行

アジア各国の演劇界は欧米と違って情報と交流のチャンネルが限られており、相互の演劇市場に対する理解も不十分なまま交流のかけ声だけが先行しているのが現状です。

加盟国相互の情報不足を少しでも解消しようと「アジア演劇年鑑」の出版が提案されました。注目されている作品、すぐれた才能を発揮しているプロデューサーや演出家、俳優や舞台美術家たち、そして劇場の設備や利用状況などの情報を互いに共有することが急務とされました。

年鑑の発行には中国国家話劇院の事務局に課せられる作業量と経費だけでなく、この目的と意義を体得してグランド・デザインを描き、強いリーダーシップを発揮する人材が必要です。詹恵登（せんけいとう）常任理事・事務局長（台湾周凱劇場基金会理事長）はラメンデュ・マジュンダ常任理事（ITI国際演劇協会会長）と数人の理事を中心にプロジェクトチームを立ち上げる提案を行いました。加盟国はそれぞれオンラインサイトを設立することによって継続的に各国の情報をシェアすることが可能になり、事務局の作業軽減にもつながります。年鑑発行の経費については周志強理事長が中国文化部の支持と助成が望まれると発言し、理事会はこれに大きな期待を表明しました。

ITIとの連携を進め連盟の体質強化

理事会はさらに今後の活動強化について意見を交わしました。まず着手しなければならないのは、アジア諸国に呼びかけて加盟国の増加を図ることです。これによって共同事業の充実と強化、さらなる拡大が期待できます。

このために、連盟はITI国際演劇協会のメンバーとして、国際演劇協会や各国センターと密接な連携を図り、交流を進めることが確認されました。

プロデューサーの台頭めざましい中国演劇界

中国では近年、中国国家話劇院、北京人民芸術劇院をはじめ、上海話劇芸術センター、広東省話劇院有限公司（ついに会社組織になりました）など中国を代表する劇団で若手のプロデューサーたちが実力を発揮し、これまでの作家、演出家主導に対して力関係の新しい拮抗が生まれつつあります。

プロデューサーとして中国国家話劇院を支える戈大力（かだいりき）、李東両氏から、日本を含めた国際的な制作者会議の開催を求める声も出されました。

第13回「アジア芸術祭」参加作品の選定について

第13回「アジア芸術祭」に日本から参加する作品の選定は、ITI日本センターを中心にアジア演劇人連盟の常任理事として連盟日本センターを構成する宮田慶子（新国立劇場演劇部門芸術監督）、伊藤巴子（日中演劇交流・話劇人社理事長）、富永程波（日本中国文化芸術センター社長）と菱沼彬晁（日中演劇交流・話劇人社事務局長）の4氏の間で進められています。

お問い合わせは話劇人社＝042・387・8389へ

アジア演劇人連盟執行委員会理事会参加者

王晨　中国文化部アジア処処長

周志強理事長　中国国家話劇院院長

厳鳳琦常任理事　中国国家話劇院副院長

ラメンデュ・マジュンダ常任理事　国際演劇協会会長＝バングラデシュ

柏崇新理事　広東省話劇院有限公司代表

符楊理事　重慶国泰芸術センター

劉鉄鋼執行委員　中国国家話劇院上演センター企画総括・プロデューサー

戈大力（かだいりき）執行委員　中国国家話劇院副院長・プロデューサー

李東執行委員　中国国家話劇院上演センター制作総括・プロデューサー

毛俊輝常任理事　香港「アジア演劇研究」代表

詹恵登（せんけいとう）常任理事・事務局長　台湾周凱劇場基金会理事長

伊藤巴子常任理事　日中演劇交流話劇人社理事長、ITI日本センター監事

菱沼彬晁執行委員　話劇人社事務局長　ITI日本センター理事

富永程波常任理事　日本中国文化芸術センター代表

孫振策常任理事　韓国国立劇場代表、韓国美醜劇団代表・芸術監督

具滋興常任理事　韓国明洞芸術劇場代表

クリス・ミラド Chris Millado 理事　フィリピン文化センター副代表・芸術監督

リイ・ヒュン Le Hung 常任理事　ベトナム話劇院院長・ベトナム青少年話劇院院長

中国国家話劇院外事弁公室

総監　劉穎
副主任　許涛
秘書　張薔

アジア芸術祭について

アジア芸術祭は新中国が成立し、国として初めて手がけた国際芸術祭です。中国文化部（文化省）が主催し、1998年に北京で実施して以来、今年10月に13回目を迎え、雲南省の景勝地、昆明市で開催されます。

アジア芸術祭の目的は、過去の軛（くびき）を脱したアジアの新面目と奥深いアジア文化のあらゆるシーンを世界に展示することと、文化部アジア処の王晨処長は語ります。アジア各国がそれぞれに伝承している多様な文化と芸術形式が一堂に会して交流する機会ともなります。

この芸術祭にやってくる芸術家たちは劇場にとどまらず、公園などの公共施設でデモンストレーションを行い、演劇の影響力を広め、演劇に対する親和感を高めます。

2011年に行われた第12回アジア芸術祭で、アジア演劇人のサミット・フォーラムが初めて開かれ、これが機縁となってアジア演劇人連盟が発足することになり、アジアの演劇人に交流の新舞台を提供することになりました。

理事会発言録

実際的で長続きする交流を

国際演劇協会会長
アジア演劇人連盟常任理事
ラメンデュ・マジュンダ

この度、アジア演劇界の畏友と再び相まみえ、この席に臨むことをうれしく光栄に存じます。

一年前、アジア各国の演劇指導者が重慶に集まって「アジア演劇人連盟」の旗揚げをしたとき、その目標は実効ある演劇交流の上に実践を積み重ねることにありました。

アジアを一つの地理的概念でくくることはできません。世界で最も多様で、最も古く、最も豊かな文化的宝庫であるにもかかわらず、この貴重な遺産の多くは未だ世界の目に触れることなく、私たちアジア人でさえ、隣国の豊富な文化や伝統を知らずに過ごしているのです。

アジア演劇人連盟はここにすぐれたプラットフォームを提供しようとしています。ここに来れば、あの顔、この顔、見知った演劇人と定期的に会うことができ、意見の交換、経験の交流、将来の計画を話し合うことができます。小さなことから大きなことへ、できそうなことからちゃんとやれることへ、アジア演劇人連盟は足かな道どりで進むことでしょう。

しかし、私たちは肝に銘じておかなければなりません。一つの組織の成否と効率は、その大部分が一人一人のメンバーの情熱とやる気にかかっています。この初心をいつまでも忘れずにいたいものです。

交流は私たちの組織の命ですが、一度の国際会議を開く経費は巨額で、頻繁に顔を合わせていられません。どうすればいいか？　オンラインサイトを設立すればいいのです。ひと月に2回の通信で、私たちは加盟国以外に世界の演劇界のニュースに触れることができます。最少の費用で実効のある方法ですが、各国はこのために人手と時間を割かなければなりません。このデータの積み重ねが季刊、あるいは半年に一度の印刷媒体となり、「アジア演劇年鑑」の発行にもつながることでしょう。

私たちはアジア人であること、また豊富多彩な演劇伝統の継承者であることを誇りに思います。この貴重な文化資源を活用してこそ、現代の演劇的実践に豊かな内実を与えてくれるのです。私たちの智慧と文化的資産、そして私たちの祖先の哲学と創造の成果を世界の人たちに知らしめましょう。

アジアの歴史を知ろう

伊藤巴子
日中演劇交流話劇人社理事長
ITI日本センター監事
アジア演劇人連盟常任理事

文化は人間の社会が創り出すと共に守り抜いていかなければならないものです。しかし、アジアの多くの国の演劇につい

て、私たちはお互い知ることができないまま今日に至っています。アジアのどの国もよい条件で演劇を創ることができない現状があり、日本の演劇の歴史も先輩たちの血の出るような困難な時代を経て今日があります。

3・11以後、演劇は何を目指し、何を創造していくか、演劇の歴史をどうつないでいくか？　日本の演劇人は不安な日々を送っています。アジア演劇人連盟はアジアの国々の歴史を知り、演劇を知り、相互の理解を深めるという大きな課題があります。この連盟が一つの共同体として成立するためには、基本的価値観、ルールを共有する必要があります。何を目指し、どのような交流を作るのか、私たちは何をなすべきなのか。人間として演劇人として深い交流を作り出していくことを望みます。

不穏な国際情勢の中で

菱沼彬晁
話劇人社事務局長
ITI日本センター理事
アジア演劇人連盟執行委員

アジアの演劇交流は今後一層緊密な連携が求められます。

アジア各国の演劇はこれまでお互い知るところがあまりにも少なく、時に無関心で過ごしてきました。また、アジアの演劇人の多くは経済的に恵まれておらず、公演を行う諸条件も十分とはいえないのが現状です。

演劇は時代の風を受けて帆を張り、多難の海に困苦の航跡を描きます。これまで世界はグローバリズムの波を受け、各国の政治・経済・社会情勢に多くの歪みをもたらしました。市場を強欲が支配し、弱肉強食の競争至上主義、そして忍び寄る経済危機が人間性を抑圧しています。

日本では3・11以後、政治・経済・社会情勢が揺れ動き、人々の心も定めなく移ろいつつあり、過激な民族主義の台頭も懸念されています。

一方、東アジアの国際情勢が危険因子をはらみ、不穏な形勢がかもし出される中、アジア演劇連盟は何を目指し、どのような交流を構築しようとしているのか。私たちにどのような役割が与えられるのか。率直な議論が望まれます。

中国国家話劇院について

中国国家話劇院は中国文化部（文化省）に直属し、劇団と劇場の双方を擁する国立劇場です。欧陽予倩、呉雪、舒強、金山、孫維世ら、それぞれの世代を代表する先駆者が同劇院の発展に強固な基礎を築いてきました。

現在、国内の最も優れた劇作家、演出家をはじめ俳優、舞台美術家、プロデューサー、劇場管理者たちが所属して才能を発揮しています。演劇の総合大学・中央戯劇学院と同根の中央実験話劇院に青年芸術劇院が合流して生まれただけに、世界的視野を持ち、旧来のリアリズムにとどまらない意欲的な作品群を発表し続けてきました。

中国国家話劇院の管理下にある劇場は「国話劇場」「国話小劇場」「国話先鋒劇場」の3劇場で、それぞれにスタイルと規模の異なった作品を上演しています。

このほか、北京を中心とする「国話ネットワーク」傘下の劇場群が姿を現しつつあり、中国国家話劇院は新しいアートマネジメント方式を用いて重点演目の全国公演態勢を強力に推し進め、各地に拠点を確保しようとしています。

中国国家話劇院は開放的な気風で運営されています。豊富多彩な舞台を押し広め、地に足のついた明晰なドラマツルギーを追求し、現代的な経営理念に則りながらも、劇団創設者、先駆者の精神を受け継ぎ、各界の力を結集しつつ、中国演劇界の旗艦として航海を続けています。

現在の院長は周志強、党委書記兼副院長は厳鳳琦、副院長は王曉鷹、査明哲、史麗体。

「小劇場演劇」中心から「中劇場演劇」へ

韓国演劇界　文化政策背景に新たな流れ

木村典子
（舞台芸術コーディネーター）

昨年末、第18代大統領選挙が終わり、今年新政権が発足する韓国。5年間、現政権が推進してきた文化芸術政策が、韓国演劇界に残したものを振り返ってみる時期となりました。そのもっとも大きなものは、劇場街・大学路（テハンノ）を中心とした《「小劇場演劇」から「中劇場演劇」へ》という演劇パラダイムの転換と考えます。

「韓国演劇」といえば、150以上もの小劇場が点在する大学路を思い起こす人が多いと思います。私にとっても、韓国演劇は大学路であり、小劇場の濃密な空間で演じられる作品群でした。また、韓国演劇界においても80年代以降から今日まで現代演劇の大きな流れを生み出し、インキュベーター的な役割を果たしてきたのが大学路です。

財団法人国立劇団（写真提供・財団法人国立劇団）

明洞芸術劇場（写真提供・明洞芸術劇場）

プロデュース公演が増加

しかし、この大学路が近年大きな様変わりを見せています。韓国演劇界は90年代後半から急速にプロデュース公演が増加し、劇団制が崩れ始めました。また、大学路に若者たちが集まり始めるとともに、カフェや酒場、レストラン、カラオケ、ブティックなどの商業施設ができ始め、地価が上昇しました。これを背景に、劇団が所有していた小劇場よりも演劇制作事務所やタレント事務所、ミュージカル制作社などが運営する小劇場が増えています。

この状況は、大学路で公演される作品の傾向をも大きく様変わりさせました。コメディタッチの作品、韓流ドラマのようなロマンス、お笑いタレントのショー、成人演劇と呼ばれるアダルト作品、そして小劇場ミュージカルが増加し、変わらぬ活気を感じさせる大学路でありながらも、以前のように小劇場発信の「現代劇」が生れづらい状況になっています。

これまで演劇のメッカといわれてきた大学路と演劇状況が様変わりするなか、数年前から国公立劇場を中心とした中劇場公演の増加という新しい流れが出てきました。この流れには、韓国の文化芸術政策が大きく影響しています。

「効率の原理」による運営

08年、現政権は発足時、国家ビジョンとして「大韓民国の先進化」を掲げました。この「先進化」には社会における対立を克服し、新たな発展のための原動力を模索するとともに、経済、文化、福祉が調和する統合された国づくりを目指すという意味が込められています。そして、これは「公共性の原則」と「効率性の原理」を基本として実効性を担保されなければならないとしました。文化芸術政策にもこの国家ビジョンを反映させ、全国民が生活を通じて文化的な暮らしと豊かさを享受できる環境を整備することを第一目的とし、「公共の原則」に従う助成、「効率の原理」による運営を政策策定の基本的な考え方としました。

「公共性の原則」とは、文化芸術領域であっても国民の税金が使用される限り、責任と義務が明確にされなければならず、助成対象もまた公的必要性に根拠を置くべきというものです。民間と公共、公共もまた中央と地方の役割を明確にし、それぞれの役割が重複することなく、その機関に合った活動が行えるように制度を整備し、体系的な推進システムを構築することを目指しました。

「効率の原則」とは、予算、人材、空間などの国家資源を効果的に運用し、最大限の成果を生み出すことです。これら資源が最大限の力を発揮できるように効率的に運用し、質量ともに優れた公共サービスを提供することを目指しました。このふたつの考え方を基本に、「事後助成」「選択と集中」「間接助成」「生活の中の芸術活動助成」という四つの方案が提示され、文化芸術の各面で改革が行われました。

その大きな改革のひとつとして、国立芸術機関とその専属団体にそれぞれ特性を持たせ、その特性を生かしたコンテンツの創造と生産、いわば作品の自主制作、そして教育プログラムなどをはじめとする各種公共サービスの提供を促しました。この改革から生まれたのが、国内外の名作と創作戯曲公募作を中心に公演する「明洞芸術劇場」（09年）、韓国公演芸術センターが運営する「大学路芸術劇場」（09年）、国立劇場の専属団体から単独機関として独立した「財団法人国立劇団」（10年）、そしてソウル市が運営する「南山芸術センター」（09年）などの中規模劇場を保有し、自主企画公演を行う機関です。

公演への直接助成が減少

同時に、文化芸術助成の面でも大きく様変わりしました。それまでは創造団体の作品制作に対する直接助成が主だったものが、劇場と創造団体のパートナーシップを基盤とする事業への助成や稽古場やスタッフを提供する助成など多様な間接助成、プログラムや公演後の作品評価を通じての事後助成で構成されました。これにより、公演資金を助成金に頼っていた小劇場での作品の数は減少傾向になりました。

このように大学路の小劇場での公演が中心だった時代から、国公立の劇場での中劇場での公演へと、演劇界の流れは作品傾向も規模も、ひいては演劇のスタイルや表現まで変わりつつあるのが、韓国演劇界の今です。

上記の中劇場公演の活性化の流れが、演劇的な成果としてあらわれるまでにはまだ時間がかかると思います。しかし、現政権が行った改革は新政権の文化政策としても引き継がれるでしょうし、ここからどんな韓国現代劇が生れてくるのか期待したいところです。

海といのち 水といのち

地球環境を考えるための日韓演劇交流
ドラマリーディングと国際シンポジウム

井上ひさし『水の手紙』
コ・ヨノク『私の名は河』

韓国語公演

ＩＴＩ日本センターは、日本を代表する劇作家井上ひさし（２０１０年４月没）の自然環境との共生を主題にした朗読劇『水の手紙』と韓国コ・ヨノク氏の書き下ろし『私の名は河』を、日韓のプロの演劇人と若い世代の共同作業による日韓演劇交流事業として、５月に光州（カンジュ）市で、８月に麗水（ヨス）市で実施。日本の現代演劇の海外での翻訳上演の着実な広がりを感じさせるできごととなりました。（報告・曽田修司）

光州市の総合大学・湖南大学の学生劇団によって演じられた『水の手紙』＝写真上＝とソウルのプロ劇団「青羽」によって演じられた『私の名は河』

光州、麗水の２都市で

『水の手紙』は、２００３年に山形で開催された「国民文化祭やまがた」の際に、日本の高校生向けに書かれた短編です。自然の叡智や、人間と自然環境との関係性を「水」という自然の恵みを題材として考えさせる優れた戯曲です。

日本、中国公演に続いて

当センターでは、これまでに『水の手紙』と環境問題を扱った海外の秀作を組み合わせ、「感劇・環境」（２００９年11月、東京・早稲田大学大隈講堂）、「地球環境と演劇」（２０１０年６月、中国・杭州市及び上海市、東京・桐朋学園芸術短期大学）というシリーズ名でリーディング公演を行ってきました。『水の手紙』の上演は日本、中国に続いて韓国が３番目となります。

今回の『水の手紙』は、光州市の総合大学である湖南大学演劇学科の教授であり、韓国演劇協会光州広域市支会会長である演出家チェ・ヨンファ氏の協力を得て、同大学の学生劇団によって上演されました。また、今回は、『水の手紙』の韓国語上演（イ・ホンイ訳）に加えて、

麗水国際博覧会で開かれたシンポジウムに参加した大笹吉雄ＩＴＩ理事と永井多恵子会長

韓国の気鋭の劇作家・演出家に新作戯曲（朗読劇）の創作を委嘱しました。新作『私の名は河』（コ・ヨノク作、キム・カンボ演出）は、韓国で有名な「源泉河」（ウォンチョンガン）伝説を基に人間と自然とのつながりが神話的な世界観を通して描かれ、ソウルのプロ劇団「青羽」（ジョンウ）の俳優たちの好演によって見事な作品に仕上がりました。

光州平和演劇祭に参加

両作品は、まず、毎年５月に開催され、全国的にも知られている「光州平和演劇祭」の参加作品として光州市ピッコウル市民文化会館にて上演され（５月11日）、好評を博しました。

また、２０１２年は、韓国・麗水（ヨス）市において、「生きている海と沿岸～資源の多様性と持続可能な活動」をテーマとする「麗水国際博覧会」が開催される年に当たっており、自然環境と人間のつながりを描く『水の手紙』、『私の名は河』の両作品は、ともにこの博覧会のテーマに相応しいものであることから、「麗水国際博覧会日本館認定行催事」のひとつとして麗水での上演が実現したものです。

同博覧会は、会期（５月12日～８月12日）終盤にあたる８月になると、連日大勢の来場者が押し掛ける盛況でしたが、本事業は博覧会場から車で10分ほど離れた麗水市鎮南文芸会館での開催であったため、集客面では苦労がありました。しかし、日韓の演劇文化交流の観点から見ると、『水の手紙』を日本、中国での上演に続き、韓国で韓国語上演したことは、日本の現代演劇の海外での翻訳上演の着実な広がりを感じさせる出来事です。

また、現在でも、日韓の文化機関が共同して演劇公演のプロデュースを行なうことは珍しく、新作戯曲の委嘱製作も行った今回の事業は、日韓の演劇交流の次のステップへの展開に寄与するものと考えられます。

麗水で演劇シンポジウム

８月８日には、２０１２麗水国際博覧会のテーマに即した国際シンポジウム「『演劇』が喚起する地球環境への感性と国際交流」を行いました。

このシンポジウムには日本から大笹吉雄（演劇評論家）、水戸雅彦（仙南芸術文化センターえずこホール所長）、韓国から『水の手紙』の演出家チェ・ヨンファの各氏と永井多恵子国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター会長が参加し、地球環境と演劇の関わりを討議しました。

この事業は、一般財団法人地球産業文化研究所の助成による「愛・地球博成果継承発展助成事業」として実施されました。

麗水での事業に対しては、国際交流基金ソウル日本文化センターから助成をいただいたのをはじめ、麗水市文化芸術催事推進委員会委員長キム・ジュンオク氏、麗水国際博覧会日本館スタッフの方々の協力を得ました。

また、ソウル在住の演劇プロデューサー木村典子さん、劇団青年座代表取締役の森正敏さんに、事業の実施全般について大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。

紛争地域から　生まれた演劇

シリーズ4年目 意欲の3作品、全回チケット完売

文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会加盟の当日本センターは、1972年以来、40年間にわたり継続的に「国際演劇年鑑」（Theatre Yearbook）を編集・発行し、国内外の演劇舞踊に関する情報交流を図っています。

09年からは「紛争地域から生まれた演劇」と題し、世界各地の優れた戯曲をリーディングの形式で日本に紹介してきました。09年の「バルカン半島」、10年の「中東」に続き、11年には「動乱と演劇」のテーマで中国、カメルーン、オーストラリアの戯曲を紹介しました（いずれも日本初訳・初上演）。このときの作品群の中に、12年のノーベル文学賞受賞作家である莫言（中国）の希少な戯曲が含まれていたことは、本企画の先進性と選択眼の確かさを裏付ける出来事だったのではないかと自負しています。

12年度は、①イラク戦争中の報道写真に材をとった『ほとりで』（クロディーヌ・ガレア作／フランス）②演劇によるタイの現代民衆史叙述の試みである『Destination』（プラディット・プラサートーン作／タイ）③イスラエルの国立ハビマ劇場とベルリンのシャウビューネの共同制作によるイスラエル・パレスチナ・ドイツの若い世代の俳優たちによるワーク・イン・プログレス作品『第三世代』（ヤエル・ロネン構成・台本／イスラエル）の3作を取り上げ、前2作は東京芸術劇場アトリエイーストで（12月22・23日）、後者は、上野ストアハウス（12月29・30日）でそれぞれ2回のリーディング上演を行いました。

全回チケット完売の盛況となったほか、観客批評家の皆様から、今回の意欲的な企画内容に対して大変好意的な評価を得ることができました。

この事業は、文化庁の「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」である「国際演劇年鑑」編集発行の一環と位置づけられており、毎回、翻訳者・演出家・出演者・スタッフの方々には新たなチャレンジによる成果の創出をお願いしているところです。編集部では、今回、いずれも見事な手腕を発揮された演出家3人のうちのお2人に寄稿をお願いしました。

『ほとりで』　作＝クロディーヌ・ガレア、訳＝佐藤康、演出＝深寅芥、出演＝宮地成子

『Destination』　作＝プラディット・プラサートーン（愛称トゥア）、訳＝千徳美穂、演出＝鈴木アツト、出演＝松浦佐知子ほか

『第三世代』　構成・台本＝ヤエル・ロネン、訳＝新野守広、演出＝中津留章仁、出演＝赤澤セリほか　　撮影：奥秋　圭（3作とも）

『Destination』を演出して

翻訳できないものこそ、観客が知りたい・感じたいと願うものではないだろうか

鈴木アツト

「translate」の語源は「重さを量る」という意味の言葉だったらしい。「重さを量る」が、「支える」という意味に派生し、「お互い支え合う」「理解し合う」等を経て、「翻訳する」に変わっていた。つまり「翻訳する」とは「重さを量る」ことなのだ。今回の『Destination』の演出で、私がまずやったのは、翻訳者の千徳さんにアドバイスをいただきながら『Destination』という戯曲の重さを量ることだった。

日本とタイでは、様々な言葉の重さが違う。例えば、「民主化」という言葉がタイではどれぐらいの重さを持つ言葉なのか、しっかりと受け止めなければいけない。「デモ」という行為の重みもきちんと量り比べる必要があった。同時に、作者のトゥア氏が仕掛けた言葉遊びの部分も探る。例えば、コムキャオという登場人物の名前は、その言葉だけだと鎌という意味で、少し風変わりな名前だという印象を持つ。けれども、名字のギャオコーンがハンマーという意味の言葉で、二つを合わせるとソ連の旗（共産党の赤旗）のイメージに早変わりする。軽い言葉が急に重くなったり、そういった一つ一つの発見はとても楽しかった。しかし、それを観客にどう届けるのかは難しい。「民主化」や「デモ」の重みも、言葉遊びも、翻訳できないからだ。

逆説的だが、翻訳できないものこそ、日本人の観客がその戯曲を通して、知りたい・感じたいと願うものではないだろうか。私は、歌に重きを置くという手法を選ぶことによって、翻訳できない部分を、観客に届けたいと思った。劇中のタイの歌を、タイ語の歌詞で日本人の俳優に歌ってもらい、タイの人々の感情をダイレクトに感じてもらいたい、そう考えたのだ。

同様に衣装にもこだわった。コムキャオの登場シーンには、「リケエの衣装を着た」という「リケエの衣装を着た」という「リケエの衣装みたいな代物で、照明を当てると、ミラーボールのようにキラキラと反射する。それが、鎌とハンマーの名前を背負った女が着ているのだ。その奇妙さは、本物のリケエの衣装でこそ、感じてもらえるものだ。

トゥア氏から一回断られたのだが、再度交渉して、リケエの衣装をタイからなんとか持ってきてもらった。

悔いが残るとしたら、リーディングではなく普通の芝居としてこの作品を観客に手渡してみたかったことです。

特定非営利活動法人
集団 日本舞踊 21

世界に誇れる日本の伝統芸能である『日本舞踊』の
継承・普及活動に取り組むNPO法人で、国内外の
第一線で活躍する日本舞踊家が流派を超えて集結し、
自然に身近なものとして楽しめる舞台の企画・公演をしています。

MAIL
syudan.nihonbuyou21@gmail.com
HP
http://www.jbs-co.com/nichibu21/

お問合せ：東京都中央区銀座 8 -12 - 3 SRビル7F TEL/090-2441-3959 FAX/03-3544-8556

紛争地域から生まれた演劇
リーディングとシンポジウム

ドイツ・イスラエル・パレスチナの〝新相関図〟『第三世代』を演出して

中津留章仁

なかなか手強い内容でした。この戯曲は専門用語も多く、中東情勢に詳しい方ならともかく、普通の日本人に果たしてどの程度受け容れられるのだろうかと心配でした。

数カ国語飛び交う原作をすべて日本語で

まず私の演出の方針としては、用語説明をしっかり行うということ、数カ国語が飛び交うのですが、すべて日本語で行うこと、そしてディスカッションが主体の内容を人間ドラマに集約すること、という3点に絞りました。

用語説明はスタッフサイドで何とかするとして、問題は残りの2つでした。すべて日本語で行う際、例えば劇中で、ドイツ語で話すときはイスラエル人やパレスチナ人には理解出来ずドイツ人しか理解出来ない（戯曲の共通言語は英語）といったニュアンスが伝わりづらいのが欠点です。

一番の問題は、後半でイシャイがパレスチナ人に銃を突きつけ、イシャイの祖母（ドイツ人が演じる）が現れるという場面で、祖母の言葉は英語から時折ドイツ語になり、それがユダヤ人のイシャイには理解出来ないのですが、実はそのドイツ語の声は、ユダヤ人がパレスチナ人に対し、ホロコーストでナチスが行ったことと同じことをしているのではないかという問いかけになるという劇構造上の大きな仕掛けになっているのです。

まずは、それをどう処理するかを考えました。最終的に「連中はみんなそう言う」という言葉を「ユダヤ人はみんなそう言う」と対象を具体化し、ユダヤ人が理解出来ない言葉をユダヤ人を咎めている言葉（内容が理解出来る言葉）として置き換えて表現しました。すべて日本語で行ったことは、個人的には無理があるように思えましたが、日本人の観客には解り易く伝わったようなので、結果としては良かったと思います。

リーディング上演に台本なしの演技

もう一つは人間ドラマへの集約です。この戯曲全体は非常にユーモアあふれるものですが、紛争をしている地域の戯曲を、日本人は笑うことは出来ないだろうと予想していました。シリアスに受け取られることを想定し、紛争の実態やそこで生きる人々の現実など、人間ドラマの要素を丁寧に描くことに重点を置きました。

リーディングは戯曲を伝えることが大きな要素ですが、台詞が入った状態ならば、より人間を見せることができると考えたからです。そのため、リーディングではありますが俳優には台詞をある程度憶えた状態で稽古に入るよう指示しました。

結果、本番では俳優は台本は持っているだけで殆ど見ずに演技しました。リーディング公演という名目でこの手法が正しかったかどうかはわかりませんが、たった5日間の稽古で俳優達は大変良くやってくれたと思います。観客の反応もこの点が幸いし、思ったより評価をいただいたように思います。

最後に、一部戯曲を改訂したことを記しておきます。まず前提として、これはドイツでの公演のために書かれたもので、基本的にはドイツ人にとって観易い工夫が施されています。そこで日本の観客に向かって話すという構成にし、台詞を足すことにしました。ドイツは戦後、金銭面を援助するなどイスラエルの意向をほとんど受け容れています。

日本と中・韓との関係をリンクさせる試み

新野さんのお話では、ドイツはメディアなどにおいてユダヤ人に対する表現などでユダヤ人協会から指摘があり問題になった場合、以後の活動はできなくなるほど影響力があるそうです。

そういったお国柄故、ドイツ人の言葉に出来ない言葉を、イスラエル人であるヤエルさんは、劇中で右派思想ドイツ人のカルステンに、我々は第三世代だからそろそろ援助をやめてもいいと思う、我々は我々の国に誇りを持たなければならない、と言わせています。

最後のシーンでユダヤ人であるアイェレットが結局カルステインがヒーローだというくだりがあり、ドイツの背景に詳しい方なら問題なく入り込めるのですが、わからない方には多少のストレスが感じられる部分があると稽古中に判断しました。

そこで日本の戦後の中国や韓国との関係とリンクするような台詞を足し、日本の観客にもドイツの抱える問題をより身近に感じてもらう脚色をしました。しかしながら、これは賛否両論あると思います。なぜなら劇中にもある通り、ホロコーストと日本が行った戦争では意味合いが全く異なるからです。それは勿論承知の上でしたが、台詞を足したことで日本人の皆様にとって作品の輪郭が鮮明に浮かび上がったことは事実です。

以上が私の演出レポートです。紛争が続けば人の命も失われていきます。そのような地域に対して、今我々日本人に一体何が出来るのでしょうか？　そして、演劇という表現が紛争と一体どのように係わっていけるのでしょうか？そんなことを考えた日々でした。

演劇という表現が紛争と一体どのように係わっていけるのか？

12年度報告

世界の同時代演劇を知る

ーITIがレクチャーシリーズ開始

ーITI日本センターは昨年から世田谷パブリックシアターとの共催で『世界の同時代演劇を知る!』レクチャーシリーズを始めました。「演劇と社会」「世界の同時代演劇」「演劇の海外交流」を三本柱に、同時代の演劇を複眼でウオッチするレクチャーを継続的に行っていきます。

世田谷パブリックシアターと共催で

《演劇と社会》▽「演劇教育の現在―アクターズスタジオ（ニューヨーク）の場合」＝小川絵梨子氏（演出家）、聞き手＝七字英輔氏　▽「アーツカウンシル構想の現在とこれから」＝吉本光宏氏（ニッセイ基礎研究所主任研究員）　▽「演劇を支える社会的仕組み」＝平田オリザ氏（劇作家・演出家・大阪大学教授）。

開催日は5月24日＝小川、8月21日＝吉本、9月13日＝平田。

《世界の同時代演劇》

①ルーマニア

▽レクチャー　ルーマニア語圏演劇の現在―民主革命とソ連解体後のルーマニアとモルドヴァから　6月7日（木）19時～21時

▽勉強会　ルーマニアの『演出家の時代』　6月16日（土）14時～16時

▽勉強会　ロシア演劇とルーマニア演劇の折衷―モルドヴァ

6月20日（水）19時～21時

▽講師　七字英輔（演劇評論家）

▽内容概説　日本ではこの20年間、シルヴィウ・プルカレーテやアレクサンドル・ダリエなど、ルーマニアの演出家による舞台がたびたび招聘上演され、また同国のシビウ国際演劇祭は国際的にも評価の高い評価を得ており、今では日本からも多くの劇団が参加しています。東欧の演劇大国であるルーマニアと日本との演劇交流を推進してきた七字英輔氏がルーマニア演劇とモルドヴァ演劇を詳しく紹介。

②ケベック（カナダ）

▽レクチャー　ケベック舞台芸術の現在―演劇・ダンス・サーカス　6月26日（火）19時～21時

▽勉強会　ケベック舞台芸術―ナショナリズムと文化政策　7月4日（水）19時～21時

▽講師　藤井慎太郎（早稲田大学教授）

▽内容概説　ロベール・ルパージュ（演劇）、ワジディ・ムワワド（演劇）、エドワール・ロック（ダンス）、シルク・デュ・ソレイユ（サーカス）など、1980年代以降、世界的に知られることになったケベックの舞台芸術（演劇、ダンス、サーカス）を、藤井慎太郎氏が豊富な映像資料とともに紹介。また、ケベックの舞台芸術の発展とケベックのナショナリズム運動の高まりとの関係についても解説。

③中東

▽レクチャー　中東演劇の現在―アラブ演劇とその背景　7月19日（木）19時～21時

▽勉強会　東アラブ世界の演劇―レバノン、ラビア・ムルエを中心に　7月25日（水）19時～21時

▽勉強会　西アラブ世界の演劇―アルジェリア、カテブ・ヤシンを中心に　8月2日（木）19時～21時

▽講師　鵜戸聡（日本学術振興会特別研究員）

▽内容概説　アラブ演劇には、政治性の高さ、女性が舞台に立つことを嫌う傾向、アラビア語の言文不一致（話し言葉と書き言葉の乖離）など、アラブ世界に特有の社会的・言語的要素が影響を及ぼしています。東京国際芸術祭の「中東シリーズ」に関わった中東文学・演劇の専門家鵜戸聡氏が、アラブ諸国の演劇史とともに、ラビア・ムルエ（レバノン）カテブ・ヤシン（アルジェリア）、を中心に現代のアラブ演劇の状況を紹介。

今年3月は「仏語圏アフリカと『演劇』」「オーストラリア演劇―先住民文化と現代演劇の出会い」

今年3月には「世界の同時代演劇」のテーマで次の2回のレクチャーの開催を予定。詳細は次をご覧ください。

http://setagaya-pt.jp/workshop/2013/03/post_281.html

①3月12日（火）19時～21時
「仏語圏アフリカと『演劇』」
講師・佐藤 康（学習院大学講師）

②3月26日（火）19時～21時
「オーストラリア演劇―先住民文化と現代演劇の出会い」
講師・佐和田 敬司（早稲田大学教授）

海外ニュース

ＩＴＩ世界大会2014年に延期

前回、中国・厦門で開催されたITI世界大会で、次回開催地は2013年ハバナ（キューバ）に決定されたが、キューバでの開催が不可能となり、大会開催は2014年に延期された。都市は未定。

ITI新メンバー国

アルジェリア、マケドニア、ナイジェリア。

ITI新・準センター

Maison d'Europe et d'Orient（パリ）、CRT St Blaise（サン・ブレーズ演劇研究所 / パリ）、Global Arts and Development Centre（ガーナ）

フェスティバル「演劇のヨーロッパ」2013

5月17日～6月14日、パリ欧州東洋研究所（Maison d'Europe et d'Orient）主催、Eurodram共催 。戯曲翻訳をプロモートすると同時に、ヨーロッパに優れた翻訳戯曲を紹介するためのフェスティバル。リーディングで翻訳作品を紹介する。

Contact : Antiny Smal, Maison d'Europe et d'Orient.antsm@sildav.org

第15回ハバナ芸術祭

10月25日～11月3日、キューバ・ハバナで。K・S・スタニスラフスキーの生誕150年記念事業として。

Contact:Consejo Nacional aaartes Escenicas fth@cubaescena.cult.cu

サン・ミューズ演劇祭

3月23～27日、モンゴル・ウランバートルで。ITIモンゴルセンターは毎年ワールドシアターデイを記念してミューズ（芸術の神）を頌える国際演劇祭を行う。30～50分の参加作品を募集。

Contact & application form : sanya_sb@yahoo.com +976-1199125576

ダッカ国際演劇祭

3月15日～21日、バングラデシュ・ダッカで。ITIバングラデシュセンター主催。国立劇場の3つのホールが会場となり、外国から6～7グループ、バングラデシュ国内約15グループが参加見込み。小編成の作品で参加希望の団体は問い合わせ下さい。会期中4日間の食費・滞在費・交通費はバングラデシュセンターが負担。

Contact: yousuff1971@gmail.com

第7回アンカラ国際演劇祭 "ETHOS"

3月22日～31日、トルコ・アンカラで。KUSAGEM (Culture, Art and Migration Activity Centre) 主催。テーマは「Art for a better world」

Contact: Tel/Fax 00 90 312 425 7183 info@kusagem.org

BEフェスティバル

7月2日～7日、イギリス・バーミンガムで。「国境を越えること」をフェスティバルのミッションとし、国籍を問わず人々を勇気づけ駆り立て誘い込む活気のある作品の発表の場であることが特徴。参加作品は30分以内の小品。ジャンルは演劇とダンス。秀作5作品に授賞あり。

Information : www.befestival.org

現代ドラマ・フォーラム

4月の3日間 、ギリシャ・アテネで。現代劇の戯曲募集（短編、20～30分）。英語または仏語で。アテネのフランス研究所でリーディングを実施後、各作者とのフォーラム開催。

Information : www.hellastheatre.gr contact: office@hellastheatre.gr

第16回オーリド国際サマースクール

バルカン半島におけるビザンチン文化理解増進を目的として、8月15日～24日、マケドニア・オーリドで。ユーロ・バルカン大学主催。バルカンの文化に関心を持つ大学院生対象。参加費300ユーロ。

会 員 消 息（2012年1月～12月）順不同・敬称略

入　会

鈴木拓（制作・舞台監督）
　所属　ARC>Tアートリバイバルコネクション東北
塚口麻里子（制作）
　特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター
新井知行（制作）
　特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター
大原典子（制作）
　特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター
壱岐照美（俳優）
　TANT
阿部陽子（俳優）
　劇団よろずや
磯健一（音楽）
　磯健一事務所
田中麻衣子（演出家）
渡辺克己（演出家・俳優）
飯田道朗（再入会・俳優）

退　会

高橋佐代子　喜多道枝
友沢晃一　三田村晴夫
三田村槙子　松浦真人
丸茂美恵子　一ノ瀬和夫
高辻ひろみ　長瀬幸子
中井多津夫　中本信幸
坂本義和　宮下展夫
伊藤正道　川口敦子
渡守　希　村井志摩子
磯　健一　小林　功
小林紀子　中根公夫
名取敏行　久米ナナ子
関根　勝　市川　猿翁
関きよし（退会後ご逝去）

ご逝去

秋元　実　藤本義一
森　光子　小沢昭一
顧問　山田五十鈴
顧問　石田種生

受賞・叙勲

松本幸四郎　文化功労賞
森下洋子　高松宮殿下記念世界文化賞
野村萬斎　文化庁芸術祭賞演劇部門優秀賞
岩淵達治　瑞宝中綬章
宮城まり子　瑞宝小綬章
坂東玉三郎　重要無形文化財各個認定（人間国宝）

編集後記

▲公益法人への移行作業は3年越しの長丁場です。膨大な書類作成業務よりも重要なのは、赤字を出さない経営と社会から評価されるしくみづくりです。多くの方々のご協力が得られてこその公益社団です。今後ともご指導ご助言をお願い申し上げます。（曽田）

▲中国でも韓国でも若手プロデューサーのめざましい台頭ぶりが報告される一方、文化行政に導入される効果主義、効率主義に危惧の声も上がっています。劇団はどうなる？　そして日本は？　中国国家話劇院を幹部プロデューサーとして支える劉鉄鋼、戈大力（だいりき）、李東氏らは国際的な制作者会議の開催を呼びかけています。（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2013）

I.T.I.　第123号
2013年1月31日発行
発行　（社団法人）国際演劇協会（ＩＴＩ ユネスコ）日本センター
発行人　永井多恵子　編集人　曽田修司
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:iti@topaz.dti.ne.jp
http//www.green.dti.ne.jp/~iti/